

新たな
連携へ

学際的連携

研究シーズがつかないだ学学地域連携

キーワード：論文探索・地域内大学・梅・機能性開発・ファンド

本事例の関係者

和歌山大学教員
武庫川女子大学教員
地域企業
紀陽銀行
紀陽リースキャピタル
わかやま産業振興財団
文部科学省産学官連携
コーディネーター



プロジェクト会議

プロジェクトの流れ

平成19年06月
研究交流会事業採択
平成19年07月
研究交流会開始
平成20年01月
地域内教員発掘
平成20年07月
研究ファンド採択
共同研究

キーワードの発見からプロジェクトは始まった

【要約】

和歌山県の主要な地場産業である梅加工産業は、将来への布石として機能性開発などが模索されている。和歌山大学にはニーズに直結した研究者が該当せず、しかし地域との産学官連携を推進するためには県の主要産業に何らかの関わりを持つことが必須である。

コーディネーターは、研究者情報データベースや特許電子図書館（IPDL）などさまざまな検索機能を使い、論文に目を通す中で、ついに新規な手法に関するキーワードを発見。関西地域内大学の研究者に行き着き、地場企業とのマッチングに成功。和歌山県のファンドを獲得しプロジェクトを立ち上げた。

【きっかけ】

地銀である紀陽銀行から県南地域の得意先企業の相談として、梅加工における廃棄物である「梅の種の機能性利用」について持ち込まれた。

コーディネーターは社長と面談する中で、目標とする商品イメージとマーケットについて曖昧であったため、十分な調査と研究の助走期間が必要と考え、そのための研究交流会を提案した。

【段取り・プロセス】

梅の機能性に着目し実用化するにあたり、機能性食品分野について商品開発、マーケット分析の両面から検討をする梅の高機能性活用商品の開発に関する研究会を提案。わかやま産業振興財団の助成事業に採択となり、企業、和歌山大学、紀陽銀行をメンバーとする研究交流会が発足した。

研究交流会のテーマは「海外マーケット研究」「機能性商品の研究開発、大手企業の事例」「食品開発におけるアイデア創出」などに関して研究交流を進め、最終回では当初の目的である梅の機能性開発に関わる講師を招く必要があった。

和歌山大学の数少ない該当教員は他の競合企業との共同研究を進めており、他大学から研究者を探索する必要に迫られた。我々がめざすところの先行研究者はすでに大学を去っていたり、海外留学中であったり、と研究者探しは暗礁に乗り上げた。

そこで、コーディネーターはインターネット上における研究者データベースや公開特許公報などで検索・情報を読み込む中で、ある論文中から食品機能性開発手法に関するキーワードを発見した。早速、当該研究者が所属する武庫川女子大学の事務室を通じて本人と連絡をとり、梅の機能性開発に興味があることを確認した。連携の第一歩として、武庫川女子大学の研究者を、研究交流会の講師として梅の産地に立地する企業に招聘することに成功した。

【成果・結果や活動後の変化】

研究交流会事業が終了後、当初の梅の種による商品開発は一旦棚上げとし、この研究者の研究シーズを核として新たに梅の機能性商品開発に関する共同研究を立ち上げるようになった。

実験ミニプラントの設置など資金の必要性から、和歌山県の研究推進ファンド「わかやま元気ファンド」を申請。採択され、機能性開発に加え、実用化・流通の側面から和歌山大学と紀陽銀行グループが参画し、産学官金による地場産業振興に関わるプロジェクトが発足した。

成功の事例

新規な発想による食品加工の道が拓かれた

●無心な研究探索がキーワードを導き出した

当初は社長のこだわりである梅の種の有効利用に関しての研究者マッチングを試みたが短期間ではうまくいかなかった。そこでひとまず研究の目的を白紙に戻し、幅広く食品機能性開発分野から探索を試みたところ、数多くの文献や情報の中から、ワンフレーズのキーワードを発見した。これで行けるのでは？という直感と未知の研究者に対する無心のアプローチが新たな可能性を生み出した。

●新規な発想による新商品が地場産業を変える

県外他大学の研究者と企業とのマッチングが成功し、研究交流会活動から1年後には前年比数十倍増の多額の資金を投入し、地域ファンドの助成も獲得し、プロジェクトを発足することができた。機能性開発を担う研究者を中心に、研究室の学生、企業の研究者、企業ニーズを仲介した紀陽銀行、ベンチャー・キャピタル部門やリサーチ部門をもつ紀陽銀行グループ、梅の流通に関する多くの研究実績を持つ和歌山大学教員などが参画し、2年間の研究開発が始まった。

この実用化研究のポイントは、従来にない発想による加工技術を使った機能性の開発である。成功した暁には、成熟期を迎えた地場産業の大きな変革に貢献することになるだろう。

新たな 連携へ



一目百万本、山一面を彩る梅の開花

失敗の事例

一人の研究者頼りになっている

●研究の個人プレーでは2年間の研究期間は少ない

もともと、一つの研究シーズとの出会いから発足したプロジェクトであるため、商品化研究の核の部分はその研究者頼りになっている。大学の研究者は、共同研究以外に入試、教育指導、大学運営などに関わるさまざまな実務で多忙である。今回のケースでも研究スケジュールの見直しが必要となった。研究助成を受けている期間は2年間だが、研究者の個人プレーに頼る体制では時間がいくらあっても足りない。一研究室に頼るリスクを考慮すべきであった。

●商品の多面的な魅力づくりを担う研究者も必要

商品化へのマーケティング検討として大学2、金融グループ2の体制をとっているが、本プロジェクトは、食という生活の中で最も注目される分野であり、かつ過当競争分野への進出であるためである。例えば、食味、食感、など家政分野、医療・福祉分野など、多面的研究分野でコアの研究をフォローする体制も計画すべきであった。

成功と失敗の 分かれ道

企業と研究者、地域の未来を考える地元の関係者が、ともに意欲を持ってハッピーになるプロジェクトづくりが成功への道

産学官連携の新たな展開に向けた提言

外との連携で地域力を高めていく

地方大学を足場にするコーディネーターにとって、大学の研究分野と地域のニーズとのギャップに苦慮することは多い。農林漁業など一次産業を基幹産業とする地域では、大学に関連分野の集積を持たないとなおさらである。

しかし、現在では単一の研究シーズがそのまま複雑な地域の問題解決に直結することは少なく、核となる研究の周辺にさまざまな応用分野を充実させてこそ、持続的な社会に貢献できる新しい技術・商品・事業を生み出すことができると考えべきであろう。

コーディネーターの仕事は、ある一つの課題から、そこから広がる未来への展望をイメージすること。そのために必要な多様な陣容を地域外からも積極的にコーディネートすることが求められる。地域外からの多彩な研究の力を借り、目先より2歩先、3歩先の姿を提示し、少し先の目標に向かってメンバーが共に働くことで、地域の魅力は強く高まっていくことになると思われる。

☆コーディネーターの一言

地域は外に開かれ、外と連携することで力が相乗的にアップする。

地域産業を元気にすることは、地域を魅力的にする作業。多様な価値を広く探索し、地域に取り込み連携する大胆な行動力が必要である。